



特別支援学級における授業づくり



今持っている力を最大限に発揮して
自ら伸びようとする子どもの育成のために



特別支援学級の担任として
今日もがんばるぞ！

子どもが学ぶことの楽しさや喜びを
実感することができる授業をしたい。
子どもの「できた」「わかった」を
実現することができる授業をしたい。

そのためには、どんなことをすれば
いいのだろう？
実際に授業づくりを進めるとなると、
次から次へと
知りたいことが生まれてきます。

子どもの学びを保障し、
確実に力を付けていくことは
わたしたち教師の使命です。

授業づくりについて考える際の
手がかりとして、
「自分の学級の子どもだったら…」と
子どもの姿を思い描きながら、
本リーフレットを
活用していただければと思います。





特別支援学級における授業づくり

今持っている力を最大限に発揮して
自ら伸びようとする子どもの育成のために

もくじ

1. 特別支援学級で学ぶことのよさは、どのようなことでしょうか? P.1
2. 特別支援学級担任は、授業づくりでどのようなことに困っているのでしょうか? . . P.2
3. 特別支援学級に求められている授業とは、どのような授業なのでしょう? P.3
4. よりよい授業づくりのためには、どのように子どもの実態把握をすればよいのでしょうか?
. P.5
5. 子どもが身に付けなければならない力を確実に身に付け、主体的に学ぶ授業とは
どのような授業なのでしょう?

実践例Ⅰ 国 語 小学校知的障がい学級 P.6
実践例Ⅱ 算 数 小学校知的障がい学級 P.8
実践例Ⅲ 算 数 小学校知的障がい学級 P.10
実践例Ⅳ 学級活動(2) 中学校知的障がい学級 P.12
6. 交流及び共同学習のねらいとポイントは、どのようなことでしょうか? P.14
7. 特別支援学級の授業づくりを推進する校内体制の整備として、
どのようなことが必要なのでしょう? P.15
8. 授業づくりで困った時は、どこに、どのように相談すればよいのでしょうか? . . . P.16
9. 特別支援学級担任の先生へのメッセージ P.17
引用・参考文献



1. 特別支援学級で学ぶことのよさは、どのようなことでしょうか？

一人一人の教育的ニーズに応じた「オーダーメイドの授業」により、子ども自身が、今持っている力を最大限に伸ばすことです。

一人一人の ニーズに 応じた教育

自分が持つ力を十分に伸ばす

障がいのある児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立って、一人一人の教育的ニーズを把握し、生活や学習上の困難を改善又は克服するための、適切な指導及び必要な支援を行います。



一人一人が意欲的に活躍する



子どもに合った教育内容を設定することで、子どもが本来持っている力を発揮できるようになり、可能性を引き出したりすることができます。このことは、障がいの有無やその他の個々の違いを認識し、様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となります。

共生社会の 基礎となる 教育

生きる力をはぐくむ教育

主体的に思考・判断・行動する

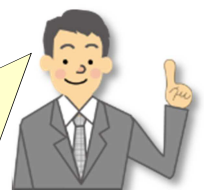
子どもは、「できるようになりたい」「分かるようになりたい」と思っています。自ら課題を見付け、学び、考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」をはぐくみます。



教育基本法第4条には、全ての子どもたちに対する教育の機会均等として「すべて国民は、ひとしく、その能力に応じた教育を受ける機会を与えられなければならない、人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって、教育上差別されない。」と明記されています。これを受けて平成19年4月の「学校教育法の一部改正」において特別支援教育が本格的に開始され、文部科学省から「特別支援教育の推進」についての基本理念が示されました。

障がいがあることで、本来子ども自身が持っている能力を最大限に伸ばすことが困難な子どもについては、個々の障がいの種類・程度に応じ、特別な配慮のもとに適切な教育が行われなければなりません。

学びを支える教師もまた、子どもの姿に学び、共に成長していく存在であり続けたいものです。





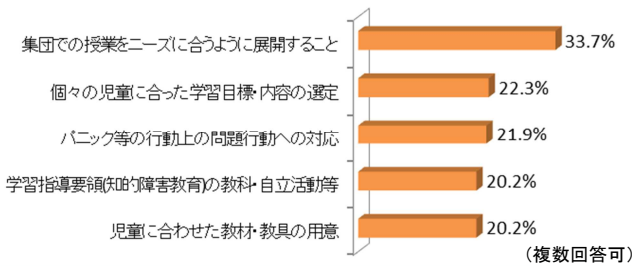
2. 特別支援学級担任は、授業づくりでどのようなことに困っているのでしょうか？

子どもが過ごす一日の学校生活において、中心となるのは授業です。特別支援学級では、子どもの自立や社会参加の基盤をはぐくむために、一人一人の教育的ニーズに応じた指導や支援を様々な工夫しながら授業づくりが進められています。しかし、特別支援学級には通常の学級とは異なる困難さや課題もあります。

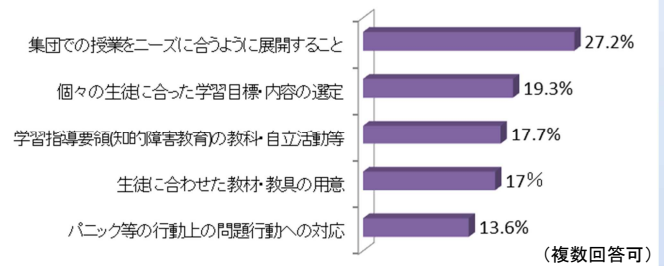
国立特別支援教育総合研究所

「知的障害特別支援学級(小・中)の担任が指導上抱える困難やその対応策に関する全国調査(平成24年度～25年度)」より

教育課程や指導に関して困っていること(小学校)



教育課程や指導に関して困っていること(中学校)



どんな授業をすれば、子どもがもっと主体的に学ぶのだろう。

授業づくり P.3、4、6～13

実態把握の大切さは分かっているけれど、何からどんなことを見取ればよいのかよく分からない。

実態把握 P.5

子どもに合った学習内容や指導・支援の方法を見付けたい。

実態把握 P.5

授業づくり P.3、4、6～13

子どもが安心して学ぶことができる学習環境にするためのポイントは何だろう。

環境整備 P.5

交流学級で学ぶことには、どのような効果があるのだろう。

交流及び共同学習 P.14

授業を組み立ててはみたものの、本当にこれでよいのか自信がない。

校内体制 P.15

授業づくりで困った時に、誰に相談したらいいのだろう。

校内体制 P.15

センター的機能の活用 P.16



本リーフレットでは、特別支援学級における授業づくりのポイントをまとめています。各校での授業づくりの参考にさせていただけたらと思います。



3. 特別支援学級に求められている授業とは、どのような授業なのでしょう？

- 子どもが身に付けなければならない力を確実に身に付けることができる授業
- 子どもが主体的に学ぶ授業

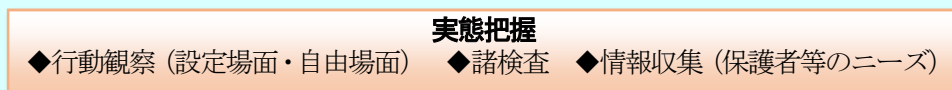
一言で言えば、『子どもの学びを保障し、生涯学び続ける力を子ども自らが獲得できる状況づくりがなされている授業』ということになります。子どもには、多様なニーズがあります。そして、授業の主人公として、自分の能力を発揮したいと思っています。授業はそのような子どもの願いを実現するための場であると言えます。

「子どもが身に付けなければならない力を確実に身に付けることができる授業づくり」のための4つのポイント

①的確な実態把握を行うこと

個に応じた指導を行うためには、個々の子どもの障がいの状態及び発達段階や特性等を的確に把握することが、極めて大切です。個に応じた指導は、教師が的確に子どもの実態把握をすることから始まります。

実態把握の方法としては、行動観察法、情報収集法、検査法等がありますが、それぞれの方法の特徴を十分に踏まえながら実施し、総合的に解釈することが大切です。また、実態の変化に応じて、定期的な見直しを行う必要があります。



情報の整理(検査結果の解釈・優先課題の明確化等)

- ◎子どものよさ（得意なところ、強いところ、潜在性）や認知・行動の特性を捉える
- 子どもの課題（改善したいところ、伸ばしたいところ、苦手なところ等）を捉える

個別の指導計画等の作成(目標・内容の検討・決定)

教育的ニーズや実態に即した指導や授業の展開

全体的な児童生徒の実態把握と合わせて、これから行う授業に関する実態を丁寧に把握することが、的確な目標設定につながります。



②適切な目標設定を行うこと

- 年間指導計画、単元の指導計画、本時の指導が連動している。
- 目標が単元の指導計画と連動している。
- 目標を具体的に設定し、評価できる指標が含まれている。
- 指導内容・目標などの指導課題が、個別的・具体的で分かりやすい。
- 目標は観点のバランスがとれたものとなっている。
- 教師同士で目標について共通理解している。

目標の設定については、その単元、その時間で達成可能な具体的で分かりやすい表記を心がけていくことが大切です。具体的に表記することで、達成状況を明確にし、次の目標を的確に設定していくことができます。

③評価システムが構築されていること

- 適切な評価規準が設定されている。
- 評価場面、評価方法が指導案に明記され、目標を達成した姿が具体的にイメージされている。
- 振り返りシート等、評価するシステムを導入し、授業の改善に結び付けている。

④教材・教具の工夫を意識すること

障がいのある子どもが自主的・主体的に学習に取り組み、学習内容を確実に身に付けるためには、障がいの状態や特性に応じて教材・教具を適切に活用することが重要です。そのためには、教師が教材・教具について絶えず研究するとともに、これらの整備に努める必要があります。

また、市販の教材・教具を利用して学習効果が上がらなかったり、子どもの実態に合わないために使用することが難しかったりする場合があります。このような場合、教材・教具を改良する、または新たに開発する等、子どもの求めに合うような工夫をする必要があります。

「子どもが主体的に学ぶ授業づくり」のための8つのポイント

①一人一人の教育的ニーズに応じた指導や支援を行うこと

実践例Ⅱ P.8,9

実践例Ⅳ P.12,13

個別の指導計画は、一人一人の自立や社会参加を目指し、組織的な体制のもとで、個の教育的ニーズに応じた教育活動を学校全体で展開するための根拠と道筋を示すものです。まずは、個別の指導計画の作成を通して、子どもの「学び方」や教師の「教え方」について共通理解を図ることが必要です。

また、授業における「個のニーズに応じた支援」は、主として教師による個別的支援によってなされますが、人に頼った支援だけでは、子どもの自立的・主体的な活動をはぐくむことは期待できません。「困っているだろう」といって、不必要にたくさんの援助をすれば、本人の意欲や本人から支援を求めるチャンスを奪っていくことにつながり、自信も育ちにくくなってしまいます。将来、社会の中で働いていくことを念頭にいた指導や支援が必要です。



②学習課題を明確にすること

実践例Ⅰ P.6,7

学習課題をはっきりと示し、何を学ぶ時間なのかを明確にします。また、学習課題や学習内容等をシートにまとめ、支援が必要な子どもが自分で確認できるように示す工夫も必要です。子ども自身が授業の中で何を体験しているのか、何を学んでいるのかが分かるように授業を展開することが大切です。

③見通しをもって活動できるようにすること

実践例Ⅲ P.10,11

必要な場合には、考える視点や道筋、方法を文字や写真で示す等、子どもが、いつ、どこで、どの順番に何をやるのかが分かり、見通しをもって活動に参加できるようにします。

④振り返りの場を設定すること

実践例Ⅱ P.8,9

実践例Ⅳ P.12,13

学習した内容が明確になるように、子どもが確認したり、振り返ったりする場を設定します。また、「できたか」「できなかったか」を子ども自身が分かるような教材づくりが大切です。

⑤自己選択、自己決定できる場を設定すること

実践例Ⅳ P.12,13

「主体性」とは、自分の意志・判断によって、自ら責任をもって行動しようとする態度です。このような態度をはぐくむためには、自分で判断ができ、責任をもって自ら行動することができるような授業づくりが必要です。

⑥授業のねらいにそった物理的環境を整えること

実践例Ⅱ P.8,9

障がいのある子どもは、「できない子ども」ではなく「できない状況におかれがちな子ども」であり、「できる状況」をつくることで、どの子どもも、持っている力と自分らしさを発揮できるようになるとされています。学びに困難のある子どもに対する授業づくりでは、理解しやすく学びやすい、そして、動いて活動に取り組みやすい環境づくりを行うことが必要です。学習環境を整えることで、子どもの自立的・主体的な取組が促進されるとともに、子どもと教師の無駄のない効率的な動線が生み出されます。

- ・子ども自ら準備や片付けをし、課題や活動に取り組みやすいように机や椅子を配置すること
- ・いつ、どこで、どの順番に、何をやるのかがよく分かるような手がかりを環境の中に配置すること
- ・どこに、何があるのかがよく分かるように、教材・教具等を配置すること
- ・適切な指導や支援をしやすいような教師の立ち位置を決めること 等

⑦学ぶ機会、学び合う機会を増やすこと

実践例Ⅲ P.10,11

学びに困難のある子どもにとって大切なことは、できるだけ学びの機会に触れさせ、それを繰り返し重ねることです。できる限り「待つ機会」や「待つ時間」を減らし、同時に連続して活動することや、並行して活動を行えるように展開を考えることが必要です。また、人間関係の形成や社会性をはぐくむには、教師や友だちと学び合う機会を豊富に設けることも必要です。「人とのやりとり」を通して、「要求」「確認」「報告」「許可」など、その場や年齢にふさわしい様々な対人的技能や社会的技能をはぐくむことができます。

子どもの主体性を引き出していく学習では、教師が一方的にやり方を話すのではなく、子どもの意見を聞きながら、教師の考えも同時に伝えていくという応答関係を繰り返し、心理的な「きずな」を深めていくことが大切です。主体的な学習とは、「教える」ことではなく「気付かせる」指導であると言えます。

⑧多様・多重な評価に努めること

実践例Ⅰ P.6,7

子どもの主体的な学びを生み出すためには、学びの機会ごとに、成果や結果から達成感や成就感、満足感といった価値観を子ども自身が抱くことができるようにすることが大切です。そのためには、授業展開で行う様々な活動ごとに「結果」に気付くことができるような評価の機会が必要です。しかし、学びに困難のある子どもは、その評価の意味を理解することが難しく、そこに価値を感じにくいことがあります。そこで、子どもが評価の意味を理解できるよう、「他者評価」「自己評価」「相互評価」等の『多様な評価』と、それを繰り返し重ねる『多重な評価』を行うことが大切です。



4. よりよい授業づくりのためには、どのように子どもの実態把握をすればよいのでしょうか？

実態把握① これまでの学習の履歴から、指導や支援の工夫の手がかりを探る

◆各教科等の「年間指導計画」及び「個別の指導計画」

これまでの子どもの学びと教師の指導の様子がまとめられた大切な資料です。特に、これから授業を行う単元（題材）と同じ内容や領域の記録は必ず確かめ、系統的・段階的な学習となるようにします。

- どこまでできているのか
- どこにつまずきや難しさがあったのか
- どのような場面で、どのような支援を必要としたのか
- どのような支援が有効であったのか

《各教科等の個別の指導計画》

※「特別支援学級担任のための手引 第2号」
(平成23年1月鳥取県教育委員会) P.40より

記録された具体的な支援内容や方法、学習評価を確認することで、これから計画をしている学習の単元（題材）目標や指導内容が、子どもにとって高すぎたり、低すぎたりはしないかを確認することができます。

◆昨年度の使用教材、テスト・ノート等の記録

どこまで学習しているのか、つまづいているところはどこなのかを具体的な子どもの姿から把握します。例えば、ノートの記述からは、1単位時間でできる作業の量や集中が継続する時間が見えてきます。また、よくできていることは、子どもの得意な力・強みと捉えて、これからの学習の中で発揮できるようにします。

◆他の教職員からの情報を集める

前担任や教科担任、かかわりのあった教職員から、これまでの学習の様子を聞きます。様々な場での有効なかかわり方や支援の方法など、記録には書ききれなかった細かな情報から、具体的な手立てが見えてきます。

実態把握② 日常の子どもの姿から、学習する内容にかかわる実態を見取る

日頃から、学習する内容にかかわる子どもの実態の把握を意識的に行いましょう。

また、単元（題材）によっては、子どもの実態に合わせて学習に関連した活動を行うことや、本人や家族から情報を得ておくことも効果的です。

事前¹に知っておきたい子どもの実態

《例》中学校・技術家庭【家庭分野の調理実習】

- ・調理に対する興味・関心や経験はどの程度なのか。
- ・調理機器や器具の扱いに関する理解や技能はどの程度なのか。
- ・日常生活における衛生にかかわる習慣や、基礎的・基本的な知識は身に付いているのか。 等

《例》小学校（中学年）・体育【ゴール型ゲーム】

- ・ボール操作の技能はどの程度なのか。
- ・シュートゲーム等の規則に関する理解はどの程度なのか。 等

実態把握に基づいて、適切な学習環境を整備する

学習に集中できる教室づくり・刺激量の調整

- * 学習スペースの前面をすっきりさせる。
- * 刺激となるものはカーテン等で覆う。
- * 集中し、力を発揮できるような机の配置を工夫する。(実態に合わせて教室を目的別に区切る。)
- * 個別学習スペースを作る。
- * 危険な道具をしまう。

教材・教具の工夫

- * 子どもの興味・関心や注意を引く。
- * 発達段階及び生活年齢に合っている。
- * 「できた」という達成感・成就感が味わえる。
- * 「もっとやりたい」という意欲が高まる。
- * 使いたい時に自由に使い、扱いやすく壊れにくいもので、繰り返し試行することができる。

学習に必要なものを自分で準備・片付けることができる工夫

- * 何を、どこに、どのように置くのか、場所を決め、視覚的に示す。
 - ・ラベルを貼る
 - ・見本写真を示す
 - ・かごを置く
- * 日常よく使用する個人の道具等は、かごや袋、カバンにまとめておく。

学習の手順が分かり、見通しをもって、主体的に行動できる工夫

- * 単元の学習の流れやスケジュールを表等に整理して提示する。
- * 本時の学習の流れや、今取り組んでいる活動を示す。
- * 終わる時間の目安や、終わった後の活動を示す。



5. 実践例 I 国語 小学校知的障がい学級

- 1 単元名 『虫ってすごいぞ Book』を作り、1年生に伝えよう ～文章の中の大事な言葉を見付け出すこと～
 中核教材 『虫は道具をもっている』さわぐちたまみ（東京書籍 新しい国語 二下）

◆実態把握

- ・A児（第3学年・男子）は、下学年適用により第2学年相当の学習を履修している。
- ・伝えたいことをまとめて話すことが苦手なために発表することに自信がもてず、人前で話すことに抵抗がある。
- ・話題が豊富で発想が豊かだが、思いつくままに書く傾向があり、テーマに沿って作文することは苦手である。
- ・問いに対する答えや、文章の中の大切な言葉等、文章を読み取る視点やポイントを明確にすることによって、内容の大体を読み取ることができるようになってきた。
- ・生活の学習では、身近な自然に生きている虫をつかまえて観察したり、図鑑でいろいろな虫の写真や名前を見たりしながら、虫への関心を高めた。



学習環境の整備

- ・虫の体のつくりややはたらきについて、比較的平易な文章や写真・イラストを用いて解説された図鑑や図書を、司書教諭や学校司書と連携して準備する。

2 単元の目標

- 虫に関心を持ち、図鑑を調べようとしていたり、調べて分かったことを相手意識を持って書こうとしていたりしている。（第1学年及び第2学年「国語への関心・意欲・態度」）
- 文の続き方に注意しながら、つながりのある文を書くことができる。（第1学年及び第2学年「書くこと」ウ）
- 文章の中の大事な言葉を見付け、抜き出すことができる。（第1学年及び第2学年「読むこと」エ）
- 言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付く。（第1学年及び第2学年「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」イ（ウ））

3 単元の概要（全9時間）

第一次（2時間）	第二次（4時間）	第三次（3時間）
○教師自作の『虫ってすごいぞ Book』を紹介し、『虫ってすごいぞ Book』作成の意欲を持つ。 ○司書教諭・学校司書と連携し、虫に関する本の紹介を行う。 ○学習計画を立てる。	○文章構成(はじめ・なか・おわり)を確認する。 ○はじめ・なかを読み、虫のすごさを伝えるための大事な言葉を見付ける。 ○おわりを読み、虫のすごさについて書いた文をもとに意見交流する。	○1年生に虫のすごさを伝える文章を書く。 ○1年生に対して、自分が調べた虫のすごさを伝える。

「並行読書」及び「大好きな虫選定」スタート

4 本時の学習（4/9時間）

- (1) 目標 虫のすごさを伝えるための、文章中の大事な言葉を見付け出す。
 (2) 展開

学習活動	教師の支援と指導上の留意点
<p>1 単元を貫く言語活動(学習課題)と、本時のめあてを確認する。</p> <p>『虫ってすごいぞ Book』を作り、1年生に伝えよう</p> <p>みぢかな虫のすごさをみつけよう</p> <p>2 前時の学習を振り返る。</p> <p>前の時間は、カミキリムシの学習をしましたね。カミキリムシのすごいところは、どこでしたか？</p> <p>カミキリムシは、大あごで木にあなを空けることができます。人間が使うドリルと同じはたらきです。</p> <p>そうですね。ドリルはあなを空ける道具でしたね。ところで、カミキリムシのすごさを伝えるための大事な言葉は何でしたか？</p> <p>「虫のなまえ」「すごいしぶん」「すごいしぶんのできること」「にんげんの道具のたとえ」です。</p> <p>みぢかな虫のすごいところをみつけよう</p> <p>今日は、カミキリムシと同じように、みぢかな虫のすごいところを見付けていきましょう。</p> <p>今日は、ケラ、カマキリ、チョウの勉強をするのですね。</p> <p>3 大事な言葉を見付けながら、教材文を読む。 ・2回音読する。 ○1回目・・・児童自身が音読する。 ○2回目・・・教師の範読を聞きながら、大事な言葉を見付ける。</p>	<p>・学習の見通しをもって活動に取り組めるように、本時の活動を確認する。</p> <p>・「単元を貫く言語活動」と「本時のめあて」を列挙して視覚化することで、両者の関連性を意識付けける。</p> <p>・児童が前時に見付けた虫のすごさを確認することで、本時も「すごさ」を見付けて読むことへの意欲付けを図る。</p> <p>・ノートにまとめてある「だいたいなことば」を見直すよう促し、黒板にキーワードを示す。</p> <p>【だいたいなことば】 ■「虫のなまえ」 ■「すごいぶん」 ■「すごいぶんのできること」 ■「にんげんの道具のたとえ」</p> <p>言語理解が弱い子どもの支援としては、カミキリムシのすごさを伝える「だいたいなことば」を提示する等、モデルを明確にして伝えていくことが大切です。</p> <p>・3種類の虫の写真を用意し、黒板に示すことで、期待感を高める。</p> <p>・特に「すごいぶんのできること」に着目しながら読むように促す。</p>



5. 実践例Ⅱ 算数 小学校知的障がい学級

1 単元名 重さ

◆実態把握

- ・B児（第4学年・女子）は、下学年適用により第3学年相当の学習を履修している。
- ・加減乗除の式の記号の意味が分かり、式を読むことはできるが、図と関連させて説明することは苦手である。
- ・長さ、かさを定規や計量カップで測定することは知っており、定規の目盛りを読むことは大体できる。
- ・身近な単位は知っているが、単位の換算をすることは苦手である。
- ・時計は、時々不注意な間違いは見られるが、時刻を読むことは大体できる。
- ・学校生活の中で何かと比べて重い、軽いと感じることを体験しているが、重さに対する量感は十分ではない。
- ・言葉を聞いて考えるよりも書かれた文章を見て考える問題の方が得意であるが、細部への注意に課題がある。

💡学習環境の整備

- ・教室に「はかりのコーナー」を設置し、休憩時間等にも身の回りにあるものの重さを量ることができるようにすることで、ものの重さを正しく測定する活動の楽しさに気付き、進んで生活や学習に活用しようとする意欲を育てる。
- ・100g、500g等のおもりを用意し、児童が自由に触れることができるようにすることで、その感覚を味わえるようにする。

2 単元の目標

重さの大きさについて豊かな感覚をもち、重さの単位とその相互の関係、測定に用いる単位や計器の選び方を理解し、重さの加減計算をすることができる。
(第3学年「量と測定」)

3 本時の学習（5 / 10時間）

(1) 目標

重さの量感をつかみ、1kgの重さをつくることができる。

(2) 展開

学習活動	教師の支援と指導上の留意点																
<p>1 スーパーで売られている商品（いずれも重さ1kgの小麦粉、砂糖、水）の重さを予想する。</p> <p>小麦粉、砂糖、水、それぞれの重さがどれくらいか分かりますか？</p> <p>長さなら大体どれくらい分かるけど、重さはよく分からないわ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習の場面を把握しやすくするため、スーパーに置かれている商品を提示して、視覚的に捉えやすくする。 ・重さを予想する活動を通して、重さは不可視的な量で概測が難しいことを実感することで、本時の学習にチャレンジしようという気持ちを引き出す。 																
<p>2 本時の課題を知る。</p> <p>実は、どれも1kgなのです。重さは目で見るのができないので難しいですね。</p> <p>大体の重さが分かるようになるのかしら。</p> <p>身の回りのものを使って1kgをつくらう。</p>	<p>💡 児童生徒が意欲をもって学ぶために、まずは児童生徒自身がやるのが分かり、やり方が分かっているということが必要です。児童生徒の目的意識を明確にするとともに、学習の見通しをもつことができるような働きかけを大切にします。</p>																
<p>3 米を使って1kgの重さをつくる。</p> <p>まずはお米を使って1kgをつくってみましょう。どのようにしてつくったらよいのでしょうか？</p> <p>500gを使えばつくれそうだけ。1kgは500g2つ分になるわね。</p> <p>ここにある小麦粉、砂糖、水を使ってつくったり、確かめたりしてみてもいいですよ。</p> <p>重すぎたり、軽すぎたりしたら、100gを使って調節すればいいわね。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・手順表を掲示し、手順を声に出して確認する。目からの情報を得ながら声に出すことにより、音声認識の弱さを補う。 ・はかりの目盛り（900g～1100gの範囲）に合格マークをつけておき、この範囲の重さであれば許容範囲であることを知らせる。 ・これまで経験している100gや500gの重さと、スーパーで売られている商品の重さを基にして考えることができるようにする。 ・「1kg=1000g」等の既習を教室内の学習コーナーに掲示しておき、児童自身が既習を活かして学ぶことができるようにする。 ・量感を養うために、重さを調節する際には、はかりからペットボトルをはずして行う。 																
<p>【手順表】</p> <pre> 1 kgをつくらう ①1kgだと思ってお米をペットボトルに入れる。 ↓ ②はかりで重さをはかる。 ↓ ③ワークシートに記録する。 ↓ ☺ やりなおしができます。 ↓ ④「できました」と先生に伝える。 </pre>	<p>【記録用ワークシート】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>使ったもの</th> <th>1回目</th> <th>2回目</th> <th>3回目</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>g</td> <td>g</td> <td>g</td> </tr> <tr> <th>使ったもの</th> <th>1回目</th> <th>2回目</th> <th>3回目</th> </tr> </tbody> </table>	使ったもの	1回目	2回目	3回目						g	g	g	使ったもの	1回目	2回目	3回目
使ったもの	1回目	2回目	3回目														
	g	g	g														
使ったもの	1回目	2回目	3回目														
	<p>💡 既習の「はかりの使い方」について確認するとともに、はかりの針を記入できるワークシートを用いることで、秤量2kgのはかりの目盛りの読み方について定着を図るようにする等、繰り返しを通して分かる授業づくりを大切にします。</p>																